

大学スポーツクラブの記録管理の現状と課題 —筑波大学を事例にして—

西川 立旺

本研究は、筑波大学のスポーツクラブを事例として、大学スポーツクラブにおける記録管理の現状と課題を明らかにし、その改善に向けた提言を行うことを目的とした。大学スポーツクラブは、競技力向上や教育的価値、地域貢献といった多様な役割を担う一方、記録管理の不統一や運用の不足が、活動の効率化や競技力向上の妨げとなっている。これらの課題に対応するためには、記録の保存、共有、活用の現状を把握し、その体系化を図ることが求められる。本研究では、文献調査、国内外の事例調査、ならびに筑波大学43クラブを対象としたアンケート調査を通じて、大学スポーツクラブの記録管理の実態を多角的に検討した。

調査の結果、多くのクラブが試合映像や練習記録、選手データといった記録を日常的に生成しているものの、それらがクラウドや共有プラットフォームを活用して管理されている例は限定的であることが明らかになった。記録の保存は、紙媒体や個人端末に分散されていることが多く、適切な引き継ぎが行われない場合も少なくない。一方で、クラウドを活用してデータを集約・共有しているクラブでは、競技力向上や広報活動の効率化、外部との連携強化が進んでいる好事例も確認された。特に、動画分析ソフトを活用した戦術研究や、SNSを用いた広報活動を通じてクラブの認知度を高める取り組みが成果を上げている。

また、調査対象クラブの規模や成績に応じて、記録管理における課題の内容や深刻度が異なることも明らかとなった。部員数の少ないクラブでは、記録管理が特定の部員に依存しがちで、属人的な運用が課題となっている。一方、規模の大きいクラブでは、記録の保存・共有に関するルールが不明確な場合、かえってデータの分散や管理の煩雑化が生じるリスクが高いことが判明した。また、学生主体の運営体制ゆえに、ITリテラシーの不足や、運営負担の過重化が記録管理の効率を下げる要因となっていることも浮き彫りとなった。

本研究を通じて、大学スポーツクラブにおける記録管理の現状と課題を総合的に分析した結果、記録の体系的な管理と利活用が、クラブの競技力や運営効率、さらには地域社会や大学ブランドの向上に寄与することが示唆された。特に、大学側の支援による統一的な記録管理システムの構築や、学生のデジタルリテラシー向上を図る取り組みの重要性が浮き彫りとなった。こうした取り組みは、記録を単なる保存物としてではなく、クラブの競技的・文化的資産として活用する道を開くものである。

以上の結果を踏まえ、本研究は、大学スポーツクラブの記録管理における現状と課題を整理し、記録の保存・共有・活用の重要性を提言する。記録を効果的に管理・利活用する仕組みが整備されれば、大学スポーツの競技力や運営効率は大きく向上し、さらには教育的・社会的価値の発展にも寄与するものと考えられる。

(指導教員 パールィシェフ・エドワルド)